

## Abstract

### アジア人血友病患者における放射線滑膜切除術と慢性血友病性滑膜炎：後方視的研究

Radionuclide synovectomy and chronic haemophilic synovitis in Asians: a retrospective study

E. M. D. Chew, S. L. Tien, F. X. Sundram, Y. K. L. Ho and T. S. Howe

放射線滑膜切除術は、白人の慢性血友病性滑膜炎に対する優れた治療法として認められているが、東アジア人に対する有効性については未だ検討されていない。我々は、放射線滑膜切除術を施行したアジア人血友病患者12例を後方視的に検討した。一次処置の平均追跡期間は30.7か月（6～55か月）であった。プロトコールに従って標的関節に<sup>32</sup>Pリン酸クロムおよび<sup>188</sup>Re 錫コロイドを注射した。結果として、関節血腫の発生頻度（中央値）は投与前の1.4回/月（0.2～7.0回）から6か月後には0.25回/月（0.0～1.8回）となり、有意な低下（80%）が認められた

（ $p < 0.05$ ）。また、1年後においても患者の半数では極めて良好な結果が得られた。術後、標的関節における関節血腫の発生を防止するための凝固因子製剤の使用量（中央値）は792単位/月（0～3,209単位）となり、術前の1,452単位/月（306～7,125単位）に比べて有意な減少が認められた（ $p < 0.05$ ）。また、疼痛スコア、関節可動域およびQOLの改善も報告され、半数以上の患者が放射線滑膜切除術の全体的結果に満足していた。結論として、血友病性滑膜炎をもつアジア人血友病患者に対しても放射線滑膜切除術は効果的であり、標的関節における関節血腫の発生を抑制し、関節内出血を抑制するための凝固因子製剤の使用量も減少させると考えられた。

*Haemophilia* (2003), 9, 632–637  
© Blackwell Publishing Ltd.

Abstract: Regina B. Butler, et al.

## Abstract

### 血友病 A 治療の実施様式 — 米国の血友病医療施設を対象とした調査

Practice patterns in haemophilia A therapy — a survey of treatment centres in the United States

Regina B. Butler, Wilma McClure and Karen Wulff

今回我々は、米国における血友病 A 治療の実施様式を確定する目的で質問表による調査を実施した。計4,129例を治療している52施設から回答が得られた。これらの施設の大部分は大学病院または研究機関の附属施設であった。患者の内訳は、17%が5歳未満、41%が6～8歳、42%が19歳以上で、重症度別では53%が重症、17%が中等症、30%が軽症であった。重症患者のうち、49%は出血時補充療法を受けており、44%は定期補充療法（予防投与療法）を受けていた（一次定期補充療法13%、二次定期補充療法20%、三次定期補充療法11%）。5歳未満の患

児に対しては一次定期補充療法が最も一般的であり、この年齢の患児群全体の25%を占めていた。一方、6～18歳の患児群では58%が何らかの形式の定期補充療法を受けており、成人患者では出血時補充療法が最も頻度が高かった。定期補充療法を開始する際の障害として、静脈アクセスが最も高頻度に挙げられた。カテーテルは、一次定期補充療法を受けていた患者の37%と、二次定期補充療法を受けていた患者の14%で使用されていた。また、大規模施設と小規模施設の治療様式に大差はみられなかった。本稿は、米国で行われている血友病 A の治療様式の特徴を包括的に報告するものである。

*Haemophilia* (2003), 9, 549–554  
© Blackwell Publishing Ltd.